

新・旧「婆沙論」の引用経について

森 章 司

一 問題の所在

こゝでは新・旧「婆沙論」の両方に存在する部分で、しかも総合的な問題を取り扱っていると見える雜蘊・雜健度（新訳・一卷〜四十五卷、旧訳・一卷〜二十四卷）を対象に、「婆沙論」の引用する経について次のような二つの問題を考察する。

まず、「婆沙論」には周知のように二百卷の玄奘訳「阿毘達磨大毘婆沙論」（新訳）と、六十卷の浮陀跋摩共道泰等訳「阿毘曇毘婆沙論」（旧訳）の二本が現存している。^①そしてこの二つの「婆沙論」の関係については、すでに何人かの先学の綿密な研究があり、これらはたゞ単なる同本異訳ではなく、異本異訳といふべきで、そこには成立の場所や思想に違いがあり、同じく有部とはいつても新訳本はカシミール有部のものであり、旧訳本はカシミール以外の有部のものではなかつたか、と想定されている。したがつてこの新・旧二つの「婆沙論」がそのような事情にあつたとするならば、それぞ

れが持つており、そしてそれぞれが使用したと考えられる経にも、それと同じような相違が認められるかどうか、という問題である。

もう一つは、所伝部派のはつきりしている南伝ニカーヤはともかくとして、現存の種々の阿舎の所伝部派についてはとかくの論議があり、これら阿舎・ニカーヤと説一切有部、ひいてはカシミール有部、非カシミール有部といつた立場が想定される新・旧「婆沙論」の引用する経とは、どのような関わりを持つているかという問題である。

二 新・旧「婆沙論」引用経の同異

まず新・旧二本の「婆沙論」が引用する経に、相違が認められるかどうかという問題であるが、機械的に両者を比較対照してみる限り、「婆沙論」自体の比較対照において見出されるようないくつかの相違が認められる。即ち、(一)一方にあつて他方ないという存欠の相違、(二)経の詳細な引用とその一部分の引用といつた広略の相違、(三)一方は偈文、他方

は長行文といった相違、(四)一方は經の引用であるのに、他方は「婆沙論」自身の文章中にとけこんでいて、經の引用であることを注意しないといった相違、(五)引用される經の事項・内容や説き方の相違、などである。参考のためにその相違がもつとも顯著に現われているものを選んで例示してみると次の如きである。④は新訳、⑤は旧訳、⑥はそれが見出される場合の相応現存經である。(傍点は相違箇所)

広略の相違

③尊者鄢陀夷言、世尊於我有大恩德、謂拔我無量苦、與我無量樂、滅我無量惡、生我無量善。(卷二九 大正二七 一五一中)

④尊者優陀耶言、世尊滅我無量惡法、益我無量善法。(卷一六 大正二八 一一六中)

⑤尊者烏陀夷……世尊為我等多所饒益、善逝為我等多所安穩、世尊於我除衆苦法、增益樂法、世尊於我除無量惡不善之法、增益無量諸善妙法。(中阿含一九二 加樓烏陀夷經 大正一 七四〇下～七四一上)

偈文と長行文の相違

③如頌言

如是五妙欲 可愛可欣樂 可意欲所牽 能令心染著(卷一 大正二七 三下)

④如說 五欲美好能令愛心增長染著(卷一 大正二八 三中)

新・旧「婆沙論」の引用經について(森)

契經の引用と「婆沙論」自身の文の相違

③如契經說、以色出離欲、以無色出離色、以聖道出離無色、以涅槃出離一切有為法。(卷三三 大正二七 一六四中)
④復次第一義是離、以色故離欲、以無色故離色、諸有所作 諸有所思以涅槃故離(卷一七 大正二八 一二四上)

事項・内容の相違

③一イ 契經說、如是補特伽羅成就善法及不善法、善法隱沒、惡法出現、有隨俱行善根未斷、以未斷故、從此善根猶有可起(余善根義)(卷一六 大正二七 七九中)

④一ロ 如彼尊者無滅所說、我由一食異熟因故、七生天上、七生人中、於最後身得尽諸漏(卷一 大正二七 四上)
尊者無滅所說……如說、具壽我以一食施福田故、七生天上、作大天王、七生人中、為大國王(卷二〇 大正二七 九 九中)

⑤一イ 如說、此人成就善法、亦成就不善法、此人不善法、滅善法更生(卷一〇 大正二八 六五上)

⑥一ロ 如尊者阿尼盧頭說、我以一食施報、七生三十三天、七生波羅奈國(卷一 大正二八 三中下)
阿尼盧頭經……如說 諸長老我一食報故七生三十三天、七生波羅奈國(卷一 大正二八 八二上)

⑦一イ 此人成就善法、亦成就不善法……此人滅善法、生不善法、此人善法已滅不善法已生、余有善根而不斷絕、從此善根當復更生善(中阿含一一二 阿奴波經 大正一 六〇)

一上・中)

◎一〇 阿那律陀…諸賢我因施_レ彼一鉢食_レ福、七反生_レ天得_レ為_レ三天王、七反生_レ人復為_レ三人王（中阿含六六 説本経 大正一、五〇九上）

このように新・旧「婆沙論」の引用する経には種々の相違が認められるのであるが、さてそれを現存の相応経とも対比して詳細に検討してみると、二つの「婆沙論」にはある立場や思想の相違があつたとしても、そのそれぞれが持つていて、そして使用したと思われる経には、必ずしもそれほど相違の差異は認められないように考えられる。即ち、(一)存欠の相違については、あるいはこゝにこそその相違が現われている可能性があるとも考えられるが、現実にはその両者を比較研究する手掛りが残されていないわけであり、引用されている一方の経の内容から想像する限りにおいては、教義上で重要な意味のあるものが欠如しているわけではないから、たゞ単に「婆沙論」自体の存欠の相違がこゝに現われているにすぎないと考えてさしつかえないであらう。また、(二)広略の相違については、特に旧訳では「乃至広説」として引用経を意圖して省略するものが多く、先に上げた例のようなものも引用経の相違を示唆すると見る必要もないように考えられる。更に、(三)偈文と長行文、(四)経の引用と「婆沙論」の地の文といった相違は、内容がよく似ておれば、それは翻訳の際の相違

ということも考えられ、特に後者は経そのものの相違であることを全く意味しない。そして最後に、(五)事項・内容の相違がもつとも注目されるのであるが、こゝに上げた二つの例にしてもそれほど大きな差異があるわけではない。(六)の例にしても、「婆沙論」の引用した趣旨は同類因を証明せんとしたのであり、両者ともにその意圖は十分通じるとし、(四)の例は、新訳がたゞ単に天と人中に生まれるとするに對し、旧訳は三十三天と波羅奈国と明示するところに違いがあるのであるが、この出典と考えられる中阿含「説本経」では別のアヌルツダ自身が説く偈の中での三十三天と明示されており、舞台は波羅奈国なのであるから、両例ともに旧訳本「婆沙論」が意味をとりて経を引用したか、あるいは旧訳において意識されたと理解してもさほど問題はないわけである。

このように「婆沙論」の二本に引用されている経に「婆沙論」自身に認められるほどの差異のないことは、筆者の調査した範囲でも二九〇例ほどが見出されるという数多くの引用の中で、相違が著しいと思われるものを選んで例示しても前記のような程度であるという鳥瞰的な見方に立つても、また首肯されうであらう。

三 「婆沙論」の引用経と現存経

次に「婆沙論」の引用する経と現存の阿含・ニカーヤとはどのような関わりがあるかという問題であるが、その手

掛りを得るために次のような二つの資料を作つてみた。これらは新・旧「婆沙論」が引用する経がどの程度現存の経に合致するかという意図のもとに調査したものであり、しかもここに云う合致とはたゞ単に「婆沙論」引用の相当経が見出されるということではなく、その文章表現上においても同一性を示すということの内容としている。即ち例えば、「契経に十支縁起を説くが如し云々」というように経の内容もしくは事項の要約しか言わない場合や、因縁故事などを簡潔に紹介するような場合は、たとえ出典が見出されたとしても除いてあり、また「婆沙論」の引用する経と類似の文章が現存経の中に見出される場合でも、それが単なる翻訳上の違いではなく、そのもととなつた原文がいくらかでも異なつていたおそれがあると考えられるものについても合致とはしていない。したがつて換言すれば、こゝに合致というのは、「婆沙論」が現存の阿含、ニカーヤ（ここでは四阿含・四ニカーヤと別訳雑阿含を主な対象とする）の文章から経証として引用したと仮定するならば、その出典はこれであると言ひ得るものである。次の表はこのような意図のもとに、雑蘊・雜毘度中に引用される経の文章について、その合致するものを探し、それが見出されたものについて四阿含・四ニカーヤのそれぞれと、偈頌の引用が多く見出されるスッタニパータ・ダンマパダなどその他のものに分類したものである。したがつてこの数字は

新・旧「婆沙論」の引用経について（森）

出典	事項		計
	他阿含・他部に 見出せないもの	他阿含・他部にも 見出せるもの	
含阿含	1	3	4
阿含	20	21	41
阿含	15	27	42
阿含	5	11	16
阿含	1	12	13
阿含	3	4	7
他經	—	4	4
DN	—	15	15
MN	—	17	22
SN	5	15	21
AN	6	15	21
Sn. Dh. 他	5	5	10
計	61	134	195

(註)

1、同一引用文が他阿含他部にも見出せるものはそれぞれに数えた。

2、雑阿含と別訳雑阿含との対応である場合も「見出せるもの」の方に入れた。

3、新・旧「婆沙論」の一方にしかない引用文も含む。

「婆沙論」の引用した経の文章と同一と考えられる文章が現存の阿含・ニカーヤの中に得られた数ということになる。なお表中の「他阿含、他部にも見出せるもの」とは、「婆沙論」の引用する一つの経の文章が、二つ以上の阿含・ニカーヤに同時に見出せるものであり、「他阿含他部に見出せないもの」とは、ただ一つの阿含、あるいはニカーヤにしか見出せないものである。ということは前者は「婆沙論」がその経証の材料とした文章は、二つ以上の可能性があることを意味し、後者は当該の一つの可能性しかないと意味するということになる。

また次の対照表は、「婆沙論」が経名を明示してその文章を引用するもの（上段）と、現存の相当経（下段）を対合したものであり、※印を付したものは文章の合致するものがそこに見出せるものである。

衆義品・義品（衆義経）——※Sn. Añhakavagga ※義足経

池喩経（池喩経）——※雜阿含一〇九
——※S. 13-2 Pokkharāṇī

諦語経（薩遮尼乾子経）——※雜阿含一一〇 ※増一阿含三七
——一〇 ※M. 35 Cūḷasaccaka-s.

梵網経（梵網経）——長阿含一一 梵動経 D. 1 Brahma-jāla-s.

師子吼経（師子吼経）——※中阿含一〇三 師子吼経 M. 11
Cūḷasānāda-s.

八分経（八分経）——

象跡喩経（経）——※中阿含三〇 象跡喩経 ※M. 28 Mahāhatthipadopama-s.

鴈陀夷経（優陀耶経）——※中阿含一一八 鴈象経

塩喩経（塩喩経）——※A. 3-99 Loṇaphala 中阿含一一
——一 塩喩経

通達経（涅毗陀経）——※中阿含一一一 達梵行経 ※A. 6-63 Nibbedhika

大因縁経・大因縁法門経（大因縁経・摩訶尼陀那経）

——※中阿含九七 大因縁 長阿含一

三 大縁方便経 D. 15 Mahāni-dāna-s.

城喩経（城喩経）——※雜阿含二八七 ※S. 12-65 Na-garasutta

（阿尼盧頭経）——※中阿含六六 説本経

円生樹契経（波利質多樹経）

——※中阿含二 昼度樹経

勝威経（禪那刹師経）——長阿含四 闍尼抄経 D. 18 Janavasaḥa-s.

（註） 1、事項・内容のみのもので文章を引かないものは除く。

2、順序は「婆沙論」引用順。

3、上段の（ ）内は旧訳による経名。

さてこのような二つの作業の結果を検討してみると、まず第一表からは、(一)「婆沙論」の引用する経の典拠が、各阿含・各ニカーヤに分散していること、(二)有部（大ざっぱな意味での）所伝と考えられることの多い中阿含に、比較的典拠の見出される数が多く、しかもこれと対応する MN には「他阿含・他部に見出せないもの」が存しないこと、一方(三)これも有部所伝とされる雜阿含については、数が多いけれども、雜阿含にはなくてこれと対応する別訳雜阿含や SN に「他阿含・他部に見出せないもの」がいくつか存すること、などが注意され、第二表からは、(四)中阿含・雜阿含に※印を付した

ものが多く、長阿含、DNには少ないこと、しかしながら(五)中阿含にも経名では一致しながら、必ずしもその文章では合致しないものも存すること、(六)大因縁法門経・大因縁経や師子吼経など、その対応経が長阿含・中阿含・DN・MNなどに二つ以上現存する経の中では、もつとも中阿含によく合致する(なおこの二経は「婆沙論」において経名を上げて文章を引用する回数のもつとも多いもので、筆者の調査した限りにおいてはそれぞれ「婆沙論」全体で四回——その他経名を上げないで引用するものが一回——あり、これらのすべてが中阿含にもつともよく合致する)という注意される。

したがって、このような事柄から新・旧「婆沙論」の引用する経と、現存の阿含・ニカーヤとの関わり方を考察してみれば、(一)から、「婆沙論」の持っていた経と、現存の様々の部派所伝とされる各阿含・ニカーヤとはかなりの共通部分が存するということがいえるであろう。もつともこのことは現存阿含とニカーヤの相互に対応する部分も多いということからも当然であると言えようが、こゝに「婆沙論」が経を引用して経証とする姿勢として、各部派に共有するものを選んだと解することもできよう。またこのことは逆に(三)・(五)などから、有部所伝とされる中阿含・雜阿含も「婆沙論」が持つていたと想像されるそれとは、全同ではなかつたということの意味する。しかしながら(二)や(四)の意味するところか

新・旧「婆沙論」の引用経について(森)

ら、現存阿含・ニカーヤの中では中阿含が「婆沙論」の持つていた経ともつとも近いということが結論されうるであろう。

- 1 「婆沙論」にはこの他、尸陀槃尼撰「鞞婆沙論」十四巻があるが、異系と解しここでは取扱わない。なおこの引用経については飯部俊英氏が「僧伽提婆の研究」(同朋大学論叢)第二十四・二十五号合併号所載)で検討されている。
 - 2 渡辺棟雄「有部阿毘達磨論の研究」、西義雄「大正大藏經毘曇部索引 上 解題」、河村孝照「新・旧両婆沙論の相違について」(「印仏研」第十五巻第二号所載)。
 - 3 大因縁法門経・大因縁経は別のものであつたと考えられるが、それでもなお両者ともに中阿含・大因縁に最もよく合致する。
 - 4 雜蘊・維鍵度中には経名を明示して引用されていないが、「婆沙論」全体では帝問経(帝釈所問経)という名で二回(経名を上げないものが他に一回)あり、これもその対応経三経、長阿含・釈提桓因経、中阿含・釈問経、DN. Sakkapāṇha-s. 中で中阿含のものに最もよく合致する。
- 〔新・旧「婆沙論」の対合にあつては、河村孝照博士の未発表論文「新・旧両婆沙の比較研究・資料篇」を参照させていたいただきました。〕